

第20回防衛問題セミナー議事録

1 日 時：平成24年3月21日（水）1800～2020

2 場 所：名寄市民会館

3 講 師：陸上自衛隊東北方面総監部 政策補佐官 須藤 彰
陸上自衛隊第3普通科連隊長兼名寄駐屯地司令 岡部 勝昭

4 議事録：

【開会の挨拶】

（北海道防衛局長 大東 隆）

本日はお忙しい中、私どもの防衛問題セミナーにご参加いただき、心より感謝申し上げます。また、日頃より防衛省・自衛隊の活動につきましての温かいご支援・ご協力を賜り、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。先ほど、司会から紹介がございましたが、北海道防衛局は広く道民の皆様に防衛省・自衛隊の役割や施策、活動などについてより一層のご理解をいただくため、平成19年度から北海道内各地でこのような防衛問題セミナーを開催してまいりました。今回のセミナーでちょうど20回目を迎えることとなります。また、ここ名寄市では初めてのセミナー開催でございます。

さて、昨年発生いたしました東日本大震災から早1年が過ぎ、去る3月11日には、被災地をはじめ全国各地で追悼式典が開催されました。そして、2万人に達する多くの死者・行方不明者に対しまして鎮魂の祈りが捧げられました。このような状況を見ておりますと、また「涙を超えて強くなるしかない」というご遺族の言葉を聞いておりますと、改めて胸にこみ上げてくるものがございます。

今回の防衛問題セミナーでは「東日本大震災から1年」と題しまして、東日本大震災に際して自衛隊がどのような災害派遣活動を行ったのか、また隊員たちが災害派遣活動を通じてどのような思いを抱き、どのような教訓を得たのかについてご紹介したいと思います。当セミナーでは、このような災害派遣活動に直接従事し、また当時の状況を「自衛隊救援活動日誌」という本にまとめられました、ここにご参加の方の中にも既に読まれた方もおられるかと思いますが、その本の著者でもあります陸上自衛隊東北方面総監部の須藤政策補佐官と、また皆様には馴染みの深い陸上自衛隊第3普通科連隊長兼名寄駐屯地司令の岡部1等陸佐のご両名からお話をさせていただきたいと思っております。本日のセミナーが防衛行政に対する皆様の一層のご理解に繋がりますことを祈念いたしまして、簡単ではございますが私の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【講演】

(陸上自衛隊東北方面総監部政策補佐官 須藤 彰)

皆さん、こんばんは。ただいまご紹介にあずかりました東北方面総監部政策補佐官の須藤彰でございます。本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。今紹介していただきましたが、簡単に自己紹介いたしますと、私は平成10年に当時の防衛庁に入庁しました。自衛官ではなく役人です。防衛省に詳しい方は、防衛省の中には『背広組』と『制服組』の2つがあると聞いていると思いますが、その分類でいきますと私は『背広組』になります。今はちょっとこの格好(迷彩服)をしておりますので、説明がややこしくなるのですけれども、震災中は、なかなか背広で被災地を回るということもできませんので、ずっと迷彩服を着ていました。以来、身体が太ってスーツがきつくなったということもありますが、ずっとこの格好をしております。政策補佐官というポストですが、5年ほど前にできた新しいポストです。実際にどういうことをしているかと申しますと、陸上自衛隊には全国に5つの方面総監部というものがありまして、私が在籍している仙台にある東北方面総監部、ここは東北6県を管轄しているのですが、そこには自治体や各省庁の出先機関がありますので、そういうところとの連絡調整をしています。また、総監に対する政策的見地からの助言もしています。震災中はもう1つミッションを与えられまして、部隊が10万人で動いていますと、すぐには司令部に情報が集まらない。どうしても大きい組織になると、司令官のところに報告が上がるまでに時間がかかります。それではタイムリーな指揮ができませんので、当時の君塚東北方面総監から「ちょっと君、現地を見てきてくれないか。」と言われました。私と、後で紹介をしますが、もう1人東北方面総監部に、法務官というポストがありまして、こちらは制服の近藤1佐が就いていますが、法務官と2人でコンビになって回ってくれないか。そこで、例えば自治体のことや部隊のこと、被災者のこと、どんなことでもいいから気がついたことを毎日報告してほしいと言われ、震災中はほぼ毎日現場に出て、いろいろと話を聞いたり、実際に様々なところを見てきました。今日はその時に感じたことなどを中心に話していきたいと思います。

この図がちょうど10万人態勢ができた時の組織図になります。ここに『災統合任務部隊』とありますが、平素は、自衛隊は陸・海・空の3つに分かれて運用されます。今回は、大臣直轄部隊として、東北方面総監が指揮官になりまして、この下で陸・海・空それぞれの部隊が動くという形で対応しました。多い時ですと陸上自衛隊で約7万人、海上自衛隊では約1.4万人、航空自衛隊では約2.3万人ということで併せて10.7万人態勢で運用していました。もう1つ、これは東北方面総監の指揮下ではありませんが、米軍です。米軍も共同の部隊ということで支援に来てくれまして、多い時で2.4万人が被災地で活動しました。

次はこの統合任務部隊の中の司令部の話になりますが、ここに防衛部や情報部などがありますが、その中にある政策補佐官と法務官、この2人でコンビを組んでいろいろ被災地を回り、我々の上官である東北方面総監に報告する、助言するということをしていました。これから資料に基づいて説明をしていきますが、その前に東北方面総監部の方で、今回の震災の活動をDVDにまとめておりますので、まずはそちらの方をご覧になっていただきたいと思います。

(DVD上映)

また資料に戻りまして説明を続けます。

今回の震災の特性です。これはテレビなどでもたくさん報道されておりますので、皆さんもご存じと思いますが、地震よりも津波の被害が圧倒的に大きいということです。海岸沿いをヘリコプターで上空から見ますと、海の中に街ができていくような錯覚に襲われます。多くの家そのまま流されておりますので、海の中に街があるような、それくらい被害が大きかったということです。それから今回は被害が広域・甚大だったということ。特に岩手、宮城、福島とこの3県にまたがるような、非常に大きな地震、津波の被害となりました。それから、これもまた皆さんご存じのことですが、津波だけではなく原発の被害もありましたので、自衛隊はこちらにも対応する必要がありました。我々の言葉で2正面作戦と呼んでいますが、そういう複合事態だったということです。さらには、地方自治体の中には、我々の目から見て、正直なところ機能喪失に陥っていた自治体もありました。これは私、政策補佐官の仕事でもありますので少し詳しく説明します。

これから厳しいことを言いますので、最初に良いことを言うておこうと思うのですが、今回の震災を通じて思ったのは、自治体、特に市町村が非常に大事であるということです。例えば救援物資が全国から送られてきますが、どこに来るかというときは県です。その県に送られてきた物資がどこに送られるかという、これは市町村です。救援物資は市町村の物資となりますから、これを自衛隊が勝手に送るわけにはいきません。今回の震災では、自衛隊が全面に出ているというイメージがあるかと思いますが、実際には市町村の枠組み、采配の下で、我々も1つのアクターとして動いているわけです。したがって市町村がうまく機能しているところは、我々もスムーズに動けます。逆に市町村がうまく機能しないと、当然のことながら我々もうまく動けなくなってしまいます。

今回の報道では、確かに自治体は大変だったと言われております。特に岩手県の大槌町、ここは町長が亡くなっております。それから陸前高田市、宮城県の南三陸町は庁舎が流されております。こういうところでは自治体が機能するのは難しいのではないかと報道でも出ておりますので、皆さんもそう考えられている方も多いかと思うのですが、実際に現場で調整をしていた感覚では、逆にそういう自治体のほうが動きはいいのです。ではどういふところが動きが悪いかというと、ほとんど被害を受けていないところ、要するに自治体の機能がそのまま残っているところです。

例を挙げるときりがなくなってしまうのですが、避難所に物資を配るといふ話をしました。その際、我々が自治体の人たちに言っているのは、「もっと柔軟に動けないですか。」ということです。それは自治体から見ると「自衛隊さん随分いい加減な事をしますね。」ということになってしまいます。震災が起きて最初の数日は、携帯電話も繋がらないので、避難所の情報が入らない。先ほど映像にも出てきましたが、道路も塞がっていますから、自衛隊の方でやっと瓦礫をよじ登って、這うようにして避難所に行きます。そこでは、震災が起きた直後でとにかく人の出入りが激しいですから、正確な人数などは分かりません。そうすると、隊員は帰ってきて「だいたい〇〇人くらいいました。」という言い方をするわけです。我々は100人くらいいるということは、毛布なら200枚くらい、食事なら最低でも300食くらいと見積もって、とりあえず配ろうと考える。そこで自治体に相談しようとするのですが、平素、特に予算などの仕事に馴れている人は「いやいや、それじゃ困ります。100人くらいという言い方は良くないでしょう。97人なのか、103

人なのか。そこをしっかりとしてもらわないと困ります。」と言ったり、「避難所から役所に対して要求がないじゃないですか。役所というのは、要求がきて初めて動くんです。」と言うわけです。私も本省にいた時は、財務省にこちらへ来いなどとは言えない。やはりこちらから財務省に出向いて、こういう予算がほしいですとお願いするのですが、こういう非常時に、しかも被災者が予算のように物資を要求できるかということなんです。我々はもっと柔軟に対応して下さいとお願いするわけですが、自治体によっては、そういうことはできませんと言われてしまう。

それから瓦礫も、一時期、報道で瓦礫の置き場がない。ですから瓦礫を集めても、置き場がなくて瓦礫が片付かない、という話があったかと思いますが、実際に現地に行くと、実はたくさん置き場があるのです。そこで、この土地は空いていますと言うわけです。そうすると、「いやいや。そこは環境部の瓦礫置き場なんです、だから道路部は使えないんです」と言うわけです。自衛隊用の瓦礫置き場も決まっています、遠くまで運ぶのは不便だと、他の部が管理している空き地に瓦礫を置こうとすると、また怒られるわけです。自衛隊は自衛隊の置き場においてももらわないと困りますと。そうするとなかなか作業が進みません。柔軟に対応して、どこでもいいですから、自治体の決めた敷地に瓦礫を置いてくださいと言うところはどんどん瓦礫が片付くのですが、縦割りで動いているところは、瓦礫がなかなか片付かない。被災者の方々は目の前のことで精一杯で、他の自治体との比較はできませんから、そういうことは分からないでしょうけれども、我々のようにいろいろなところを見ていると、この自治体は何故こんなに作業が遅いのかと感ずることもよくありました。

私の仕事は自治体との連絡調整になります。今東北の各自治体が防災計画などを作り直しています。計画はしっかりと緻密に作っていただく必要はありますが、私から1つお願いしていることは、必ず「想定外」というものが起きる。どんなに立派な計画を作っても「想定外」は起きる。その時に誰が対応するのか。当たり前ですけども人間です。計画ではないわけです。したがって、計画づくりと並行して、職員が柔軟に対応できるよう心構えをして下さいとお願いしています。何故こんなことを言うかということ、避難所を回っていると、この避難所には、これほど多くの自治体の職員は要らないと感ずることがあります。ライフラインがしっかりと整っている、自衛隊も入浴支援などを行っている。こういうところは職員が1人いれば十分です。だからこちらは、こんなに職員は要らないです、他のもっと大変なところへまわした方がいいですよと言うわけです。そうすると、決まったように計画に書いてありますからと言うのです。逆にライフラインが回復していなくて、劣悪な環境にある避難所もあります。そういうところにこそもっと職員の数が必要ですよと言うと、同様に計画に書いてあります、1人しか置けないことになっていますと言うのです。これでは何のための計画かわかりません。職員が柔軟に動けるようにするための計画でなければなりませんし、職員も計画に書かれていないこと、つまり「想定外」が起きたときには、一人ひとりが責任をもって、柔軟に対応する必要があるということを確認する必要があります。

ちなみに、市の言い分では、我々は二次避難を進めているのです、こういう劣悪な環境に避難されていると体調を崩されるので、温泉地に皆さんを収容できることを確保しています。劣悪な環境に避難されることを前提として、職員を多く配置して支援するのではなくて、早く劣悪な環境から二次避難をしてほしいのですということでした。ただ、実際

にその避難所の方に話を聞くと、何故こんな劣悪な環境にとどまっているかが分かるのです。簡単なことです。要するに、家族が見つかっていない。家族が見つかったらすぐに駆けつけられるようにそこにいるわけです。何でもない時であれば、私も温泉は大好きですから、温泉地を用意しましたと言われれば進んで行きますが、家族が亡くなられて、または行方不明になっている。こんな時に温泉に行ってくださいと言われてもなかなか行けないものです。柔軟な対応、臨機応変の対応と言うと、とても難しいことのように聞こえますが、要するに、自治体も自衛隊も、被災者のためにできることは何でもするという立場は同じですから、そのためには、まず被災者から話を聞くことが何よりも大切になります。市役所の庁舎に留まって、頭の中で二次避難を考える前に、劣悪な環境の避難所に少しでも多くの職員を派遣して、そこで実際に被災者から話を聞けば、もう少し被災者のニーズに合った、我々が目標としていた被災者に寄り添った支援ができたのだと思います。

繰り返しになりますが、市町村は本当に大事です。我々自衛隊も市町村がうまく機能しないとスムーズに動けなくなってしまいます。市町村に苦勞をさせられたから、市町村のことが嫌いだから、こういう厳しいことを言っているわけではありません。本当に重要な存在だと思っているので、今もそうですが、市町村にはかなり厳しいことを言わせてもらっています。

次は、自衛隊の活動の実績をまとめたものです。

最初の人命救助ですが、トータルで19,300人の方を救出しております。ピークは、ここがポイントになります。後ほど説明しますが、3日目の3月13日で、約5,000人の方を救出しております。

それからご遺体の収容は9,505人、全体の6割の方を自衛隊の方で収容しております。収容者数のグラフを見ますと、特に最初の1週間がピークになっています。

医療支援ですが、民間の病院の多くも被害を受けていますので、自衛隊の医官が代わりに診察にあたり、トータルで23,370名の方を診察しております。グラフを見ますと10日目くらいからピークになっています。

今度は生活支援の方ですけれども、給水については3万3千トンです。これもグラフを見ますと、大体1週間目くらいから山が上がってきます。

給食支援は、桁がものすごく大きいのですが、500万5千食を提供しています。これも同じく1週間を過ぎたあたり、特に10日目くらいからピークになっています。

入浴支援も約109万人の方に支援しておりますが、これも10日目くらい経ってからピークを迎えております。

どうして生活支援をすぐに本格化できないかと言えば、当然、自衛隊も準備に時間がかかるということもありますが、一番大きい理由は、発災当初は人命救助に力を注ぐ必要があるためです。よくテレビなどで、この避難所にはおにぎりが1個しかこない、1日に1人1個のおにぎりではひもじい、自衛隊は何をやっているんだ、自衛隊は情報を取っていないのではないか、という批判もありましたが、我々もそういう状況は知っているのです。この避難所に物資がないということはよく分かっているのです。ただ瓦礫の下には、今まさに息を引き取ろうとしている人がたくさんいます。どちらを優先するかといえば、どうしても人命救助の方になります。我々も避難所にいる方の苦勞は十分に分かっていますので、とても心苦しかったのですが、やはり当初は人命救助を優先し、生活支援については、本当に危機的なところへ最小限の物資を配るという形で対応していました。したが

って、生活支援のピークは後の方になっているわけです。

このように、自衛隊の運用では、当初は人命救助に力を注ぐこととなりますので、これから先、防災計画を立てる時には、皆さんの方でも、例えば3日間くらいでも食糧など必要なものを備蓄しておいていただけますと、我々も人命救助に集中することができます。その点をご留意をいただけますと幸いです。

これは映像にも出てきましたが、自衛隊の活動前と活動後の写真です。このように最初は瓦礫でいっぱい、どこが道で、どこが家だったのか分からないような状態でしたが、最終的には何もない形にしています。我々の任務は、あくまで行方不明者の搜索で、瓦礫を片付けることが目的ではありません。ただ、行方不明者の搜索活動では、そこに誰もいないことを確認しながら、1箇所、2箇所と瓦礫を片隅に寄せていくのですが、そうしますと、お子さんなどの行方が分からないご家族の方は、ひょっとしたらあの下にいるんじゃないか、自分の子供とかがいるんじゃないかなどと、どうしても気になってしまうのですね。我々は全部確認した上で、瓦礫を片隅に寄せているのですが、ご家族の方は気になられて夜も寝られない、気持ちがどうしても納得できないわけです。したがって、司令部としては、各部隊に搜索活動を命じるだけで、瓦礫についてはどこまで片づけなさいということは指示をしていないのですが、現場にいますと、そのようなご家族の強い気持ちが痛いほどよく分かりますので、そこは活動に当たる各部隊の判断で、「行方不明者の搜索」の内容を広く考えて、なるべく瓦礫を残さないように搜索をしていました。

ここは、テレビでご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、大川小学校といいます。児童108人のうち、7割の児童が亡くなられ、あるいは行方不明になりました。このように、最初、学校の中は瓦礫で埋もれています。押し波で学校の物が全て流されて、引き波で色んな物が入って来ています。タイヤとかウィスキーの瓶などの瓦礫で一杯でした。学校の中は機械を使って片付けるわけにはいきませんので、全て手作業で瓦礫を取り出し、最終的には何もない状態にしております。やはりこちらも、親御さんが、瓦礫が少しでも残っていると、頭ではそこには自分の子供はいないと分かるものの、気持ちがどうしても落ち着かなくなってしまうということで、このように瓦礫も片付けております。

こちらは、原発の20キロ圏内での行方不明者の搜索活動になります。側溝の中に潜り込んで何をしているのだろう？と思う方もいらっしゃると思いますが、小さいお子さんがこういうところに流されていることもありますので、このようにあらゆる隙間に潜り込みまして、隅々まで漏れなく搜索をしております。

また、原発の20キロ圏内が他とは違うところは、被災者の方はこの中に入れないということです。他の場所ですと、津波が来た場所であっても、自分の家がどのようになっているか、自分の目で確認することができるわけです。ところが、原発の20キロ圏内になりますと、立入りが制限されていますので、自衛隊や警察などしか入れません。なので、皆さん自分の家がどうなっているか大変心配をされておりました。したがって、この地域を担当した部隊では、皆さんのお気持ちを十分に汲んで、他の場所と同じように瓦礫を片付けながら徹底的に搜索を行うとともに、家の状況が分かるように写真を撮って、あなたのお家はこのようななっていましたと説明するようにしていました。確かに被害を受けていますので、綺麗で元通りというわけにはいかないのですが、写真を渡しながら報告しますと、被災者の方は、自分の家の状況を確認することができてよかったとおっしゃってくれたそうです。

こちらは、生活支援の一環で、現地のニーズの聞き取りです。我々は御用聞きと言っておりましたが、被災者の方に声を掛けて、とにかく困っていることはないか、いろいろお話を聞いていきます。最初は食べ物、水、毛布とニーズはシンプルです。しかし、段々時間が経って来ますと、毎日同じものを食べていると、どうしても飽きてきますし、栄養状態も良くありませんので、野菜が食べたいとか暖かいものが食べたいとニーズが多様化してきます。衣類でも、単に寒さを凌げばいいというレベルから、もう少しお洒落な服を着たいというニーズも出てきます。また、さらに時間が経ちますと、自分の将来のこと、仕事は続けられるのか、自分の家をもう1回建て直して同じ場所に住むことができるだろうか、そのような点も気になってきます。また、避難所生活も長くなりますから、いろんなご不満や悩み。例えば、誰々さんの躰がうるさいというのもあります。もちろん自衛隊として、相談を受けても、解決できないこともたくさんありますが、皆さんからお話を聞きまして、我々でできることは対応するようにしました。仮に解決できない問題でも、少なくとも誰かに話をしたことですっきりしたという方も結構いらっしゃいましたので、我々としては、とにかく皆さんのお話をしっかり聞くことを心懸けて活動しておりました。

あと、この写真のように、女性の被災者に女性隊員が対応していますが、今回の活動を通じまして、男性隊員よりも女性隊員の方が上手に対応できる仕事があるなど感じたところですが、この御用聞きなどもまさにそうだと思います。例えば、化粧品がほしいと言われても、我々男性ではよく分かりません。また、いろんな人生相談にしても、いかつい男性の隊員が相手ではなかなか話しにくいと思います。やはり女性の隊員の方が話をしやすいのでしょうね。女性ならではの仕事、女性の方が男性よりもうまくできる仕事が、今回の震災では実際にあったと考えています。

これは入浴支援です。こういう形でテントを張り、その中に浴槽を用意して、皆さんにお風呂に入ってください。被災者の方からお話をお聞きすると、普段と同じ事をした時に、普段と違う場合、例えば、普段毎日入っていた風呂が、あまりにもみずぼらしいとか、あまりにも不便だということになると、非常に惨めな気持ちになられるとのことでした。そこで、各部隊でそれぞれ考えまして、単にお風呂に入ってくださいだけではなく、たとえば、社交の場を設けて、お風呂上がりに皆さんでお話をしていただいたり、お化粧する場所を用意したり、創意工夫をしています。

これは米軍の活動です。米軍の活動は多岐に及んでいます。DVDにも出てきましたが、仙台空港の復旧支援をしてもらっています。また、学校のクリーンアップ作戦、つまり復旧ですが、4月には学校が始まるが、瓦礫が多くてとても学校を始められる状況にはないということで、米軍にもお願いをして学校の片付けをしてもらっています。

今反省しているのは、もっと早く、米軍にいろいろとお願いをしておけばよかったということです。実は当初、米軍がどういう事してくれるのか、よく分かりませんでした。どのような機材を持っているかよく分からないし、それ以上に、米軍がどういう気持ちで日本に来てくれているのかが分かりませんでした。写真にありますような学校の清掃は、地域にとっては非常に重要な作業ですが、要は手作業ですので、人数さえそろえば片付けられます。野球でも、4番バッターにバントをさせていいのかどうかというふうな話と同じで、米軍じゃなくても、自衛隊じゃなくても、人数がそろえば誰でも片付けられる作業を米軍にお願いしていいのかなと悩んでいました。

しかし、活動が始まって、米軍の担当と毎日話をしていると、彼らからヒシヒシと熱い

ものを感じるわけです。俺達はとにかく日本を助けるために来たのだから、どんな仕事でも、どんな事でもいいからやると言ってくれました。最初の表でも説明しましたが、我々は統合任務部隊、ジョイントタスクフォース (Joint Task Force) なのですが、米軍は統合支援部隊、ジョイントサポートフォース (Joint Support Force) なんですね。つまり、支援をするために来ているから、俺たちは主役じゃなくていいからということなのです。「名は体を表す」を地でいっているわけです。そして、そのサポートは何かといえば、それは自衛隊を助けること、自衛隊を支えることだから、とにかく自衛隊がやっていてどうしても手が回らないこと、困っていること、そういうようなことは、どんなことでも、何でもやるからと言ってくれました。お互いに強い信頼関係ができてからは、もう遠慮なく、学校の復旧などいろいろなことをお願いしました。米軍の方も、被災者のために少しでも役に立てることは大変光栄だと、本当に力強く、手抜きすることなく精一杯やってくれました。地味な活動で報道で取り上げられる機会は少なかったのですが、地元では、米軍の支援もあって、無事に新年度の4月を迎えることができた大変好意をもって、その活動を評価していただきました。

また、写真のように救援物資の輸送も米軍にお願いしました。この関係で、1つ困った事がありました。「この物資を、どこそこの場所に、何時に運んで下さい。」とお願いをするのですが、毎回、必ず時間と場所を間違えるのです。最初は、自分の英語が下手なのかなと思っていろいろ反省したのですが、紙に書いてメモを渡してお願いしても、それでも間違える。「いったい米軍はどうなっているんだ」と、米軍の担当に文句を言ったことがあります。そうしたら、「ミスター須藤、おまえは分かっていない。まだ青い」と。「自分たちはいろいろな国に行って、数多くの生活支援をやっている」。最近ですと、インドネシアのアチェというところですよ。それで「よく考えてみろよ。決められた時間と場所に物を置くと誰が勝つんだ？若い男に決まっているじゃないか。だから俺たちはわざわざ時間と場所を外している。そうすれば、予定の地点で待っている若い男を出し抜いて、女性や子どもにだって、物をもらえるチャンスが生まれるじゃないか。」と言うわけです。なるほど、そういう考え方をするのか、と感心しました。ただ、皆さんもよくご存知のように、日本人はそういうことはしません。そういう人たちじゃないんです。ただ、それを言葉で説明するとなかなか難しい。そこで、ちょうど、私のいます仙台の東北方面総監部の前にある小学校も避難所になっていましたから、百聞は一見にしかずと考えて、とにかく来て欲しいと米軍の担当をそこへ連れて行きました。タイミングがいいことに、ちょうど食べ物を配っているところで、皆さん一列にしっかり並んでいます。若い男の人も、お年寄りも子どももです。誰も割り込まず、ましてや力づくで奪ったりなんかするわけもない。しかも、その日は特別に子どもにだけ、「おまけ」でチョコレートあげるようになっていて、子どもたちがチョコレートをもらって喜んで食べている。その光景を見まして、米軍の担当も「信じられない。これはもうタイタニックの世界だな」と、非常に感心してくれました。こんなことは、日本にいれば、当たり前な光景ですが、そのときは私も同じ日本人として本当に嬉しかったですね。米軍もよく日本人のことを理解したようで、それ以降はこちらがお願いすると、ちゃんと決められた時間、決められた場所にしっかり物を届けてくれるようになりました。

私は、困った時とか辛い時、こういう時に人間の真価というか、その人の価値みたいなものが出てくるのだと思います。米軍は、我々が困った時に、とにかく何でもやる、どん

な作業でもやるからと言ってくれました。俗な言い方ですが、本当にいい奴だなと思いました。また、逆に米軍の方も、こういう時でも、日本人は取り乱すことなく、このように秩序だって行動していることを分かってくれたと思います。「いろいろな国を支援してきたけれども、日本ほどレベルの高い国はない」と非常に感心してくれました。私も日本人としてとても鼻が高かったです。

こちらは戦力回復です。我々の活動も長くなりました。自衛隊も厳しい訓練を積んでいるとはいえ、やはり人の子です。気合いだけでは乗り切ることができませんので、隊員を休養させることにしました。被災者を支援する隊員は元気でなければいけませんから、理屈の上では、休養を十分にとって、栄養のあるものをたくさん食べる必要があります。しかし、被災地にひとたび足を運べば、本当に困っている被災者の姿を目の当たりにするわけです。そうすると、隊員は、自分たちは缶詰でいいから、温かいもの、栄養のあるものは、少しでも多く被災者の皆さんに食べて欲しいと思うのです。お風呂も、自分たちはいいから、被災者の人たちに入ってほしい。この気持ちは私も痛いほどよく分かりました。ただ、毎食缶詰で、お風呂に入らず、夜はずっとテントの中で生活していれば、どうしても身体に負担がかかってしまいます。隊員が倒れてしまっただけでは元も子もないので、ちゃんと食べなさい、お風呂にも入りなさいと指示をするのですが、もうこれは一人の人間として、やはり被災者を差し置いて、温食をいただいたり、お風呂に入ったりすることはできないのですね。

そこで、この写真のように、山形県にある駐屯地など、活動地域から離れた場所に、隊員がゆっくりできるスペースを設けて、たとえば1週間活動したら、1日か2日、こういう場所で、ベッドの上でゆっくり寝かせる。お風呂にも入らせるし、温かい御飯も食べさせる。「戦力回復」という言葉を使いますが、そのように対応しておりました。生活も落ち着いた今、改めてこの写真を見ますと、体育館にベッドが並んでいるだけで、あまりゆっくりできないような気もするのですが、屋根もあるし、床もあるところにベッドを置いて、ゆっくり寝られる、あの当時はそれだけでも幸せでした。

今隊員も人の子という話をしましたが、今回の震災では、隊員自身も少なからず被災しています。ただ隊員は自分の家族が被災していても、招集がかかっていますので、災害派遣活動をしなければいけない。したがって、一生懸命に捜索はしているけれども、自分自身の家族は捜索してあげられないという例もありました。そこで今回は『隊友会』、自衛隊のOBが作っている組織ですが、そちらにお願いして、ボランティアとして、隊員の家族の捜索などをお願いすることができました。今日は隊友会の方も会場へいらっしゃっているようですが、ご支援、本当にどうもありがとうございました。今回の震災を教訓としまして、今後は、戦力回復や隊員やその家族の支援などについても、さらに力を入れていきたいと考えております。

こちらはメンタルヘルスです。今まで話してきたことは過去の話になりますが、メンタルヘルスについては、今現在も続いている話ですし、今後も注意する必要がある問題です。なぜメンタルヘルスは時間をかける必要があるのか。これは隊員だけの問題ではなく、被災者にも当てはまることだと思います。

会場には人生経験豊富な方がたくさんいらっしゃいますので、お分かりだと思っておりますが、人間というのは本当につらいことは相談できないものですね。相談するということは、つらいことを言葉にしたり、文字に書いたり、つまり、もう1回思い出さなくてははいけな

い。だから本当につらいことは相談できないのです。考えたくないのです。今回、自衛隊の方でアルバムを探して、それをご家族にお渡ししているのですが、マスコミの方などが、子供にアルバムを渡しているところを写真に撮ろうと待っていることもあります。しかし、子供がそのアルバムを見ようとしなない、という場面もあります。カメラマンはがっかりして、最近の子はドライだな、冷めてるなど言うのですが、そうではないのです。その子にしてみれば、家族はどうでもいいと考えているからアルバムを見ようとしなないのではなくて、家族のことが好きでたまらないから、そしてそれを思い出すとつらくて仕方ないから、アルバムを見ようとしなないのです。

今回、いろいろと話を聞きますと、津波は1回だけ大きいのがドツときて、それが引くときに多くの方が亡くなられているというイメージがあるのですが、実際には、何回も津波が来ているそうです。そして、津波の第1波を避けることができたのに、第2波、第3波で亡くなられている方も数多くいらっしゃるそうです。もちろん、いろいろな事情があると思うのですが、中には、自分の子供のことが気になって、一度は高台に逃げたけれども、また家や学校の方に探しに行ってしまう。あるいは、子供もせっかく逃げたのに、自分の親が気になって家に探しに行ってしまう。そこで第2波、第3波の津波に遭って、亡くなった方もいるそうです。そうすると残った子供は、自分のせいでお父さんやお母さんが亡くなってしまったのではないかと考えてしまうわけですが、逆に親は自分のせい子供が亡くなってしまったのではないかと考えてしまうわけですが、肉親を亡くして、ただでさえつらい。さらには、危険を顧みずに自分のことを探してくれた。そして、そのために、亡くなってしまった。そういうことを考えていると、もうつらくて仕方ないのだと思うのです。だからアルバムなどを渡しても、見たくない、思い出したくないのです。

私も、東松島市というところで避難所を訪ねたことがあります。入口のところで携帯電話をかけている子がいました。話をしているのではなくて、架けているだけです。友達にでも電話しているのでしょうか。そのときは結構楽しそうに見えました。ところが、しばらくして、私が避難所の中で被災者の方から話を聞いて出てきても、まだ同じように架け続けている。あの頃は通信状況がよくなかった頃なので、電波がうまく届かないのかなと気になりました。ちょうど声をかけようとしたら、近くにいたその子のおばさんが、「あの子の両親は亡くなったんです。亡くなっちゃって埋葬もしているんです。あの子には説明もしたし、埋葬の現場にも立ち会わせてのに、あの子は理解できないんです。それでずっと親の携帯電話に連絡しているんです。」と話をしてくれました。見ると私の娘と同じくらいで小学校6年生か中学校1年生くらいでしょうか。さすがに親が死んだということを理解できないことはないと思います。それでは、なぜ死んでしまったと分かっている両親に電話を架け続けるのか。やはり考えたくないのだと思うのです。両親が死んでしまったと考えると、あまりにもつらすぎるから、一生懸命に電話をかけて、両親はきっと携帯電話の向こうにいて、架け続けているのだと思うのです。自分の両親が死んだという事実を認めたくないし、考えたくもない。

このように、本当につらい経験をした人たちは、最初のうちは、そのことを考えないように、思い出さないようにするのがいいですね。したがって、メンタルケアが必要です、相談してくださいと言っても、なかなか相談しようとはしないのです。

余談になりますが、紹介にありましたように、私は本を出版しました。1冊1,000円の本なので、この本を1冊売ると、私の収入として印税が100円入ることになってい

ます。ただ、私は公務員なので、これをもらうわけにはいきませんから、全額を放棄しています。その際、この本を出版した扶桑社も心意気のある会社で、私が放棄した分を会社の収入としてもいいのですが、須藤さん、どうしますか。寄付をしますか？と聞いてくれました。そこで、自分なりに考えて、最終的に「あしなが育英会」に寄付をすることにしました。扶桑社の話では、本もかなり売れているようで、育英会には数百万円の寄付ができたそうです。そうしますと、育英会の方からも、時折連絡があるのですが、須藤さんに対してぜひ子供たちからお礼の手紙を書かせたいと思っているのですが、なかなか書いてくれないと言うのです。お礼の手紙がほしくて寄付しているわけではないので、そういう気遣いは全然必要ないのですが、ここでも子供は感謝しているとか、していないとか、そういうことではなく、要するに、過去のつらいできごとを思い出したくない、考えたくないわけです。

ただ、先日の11日で、ちょうど震災から1年が経ったということもあって、人それぞれではありますが、中には少し気持ちの整理がついてきたという子もいるようです。少しずつですが、自分のお母さんが死んでしまったとか、お父さん死んでしまったという話をしたり、思い出せるようになってきた子もいるようです。震災当初から、メンタルケアの必要性は言われていましたが、心のケアは、悩みを抱える人たちが、心を開くようになってからしか対応することができません。したがって、私の感覚では、ようやく今スタートしたと思っています。熱しやすく冷めやすい、という対応ではいけません。震災当初、誰もがつらいできごとを思い出したくない時に、君たちの悩みを聞いてあげるからと追いかけて回しておきながら、徐々に気持ちの整理がついてきて、誰かに自分の気持ちを打ち明けたい、自分の話を聞いて欲しいと思った時には、もう周りに誰もいないということではいけません。被災者の心のケアは長期的な視点で支援していく必要があると考えております。

少し前置きが長くなりましたが、被災者と同様に、自衛隊の方でも、最近になっても、気持ちの不調を訴える隊員が見受けられます。私の感覚では、だいたい2つのタイプに分かれると思いますが、1つは司令部などに勤務していた人や部隊では連隊長など長がつく人、つまり全体を見る立場にいた人たちです。既に1年が経過しましたが、それでもなお、あの時に、もっといろんなことができたのではないかと考えてしまうのです。私自身もそうですが、震災の当初はとにかく情報がない。情報もなければ、人も足りないし、車両もない。とにかく資源がないのです。それでも、刻々と被災者の命が失われていきますから、一生懸命考えて「総監、このようにしたらどうでしょうか。」と進言していくのですが、今でも、先ほど述べたようなつらい思いをしている子供の姿などを見ると、もっと他にできることはあったのではないかと考えてしまいます。確かに、自分の中では最善を尽くしたと思っています。あの状況では、あれ以上のことはできなかつたと、精一杯のことをしたと思うのですが、それでも、現に多くの方が苦しんでいるところを見ると、本当にあれが最善だったのか、もっといろんな事ができたのではないかと思わずにはられません。

ちょうどこの日曜日に、子供を連れて、岩手県の大槌町というところへ行ってきたのですが、ここは被害が大きくて、発災直後の3月15日に入った時は、トンネルを抜けて橋を渡ると、全く別の世界が広がっていました。瓦礫とご遺体が積み上がっていて、文字どおり「言葉を失う」状況だったのですが、1年が経ちまして、瓦礫はきれいに片付いていました。ただ街があった場所を歩いていますと、元々は家が建っていたと思うのですが、

その場所で、私と同じ年くらいのお母さんが、アルバムを広げながら静かにじっと見ているのです。そういう姿を見ると、この人のために、何かできることはなかったのだろうかと思うわけです。もう1年が経っていますが、今でも罪悪感というか、自責の念にかられることがあります。

もう1つのタイプは実際に現場で活動した隊員です。ご家族の方に感情移入してしまうのです。事前に臨床心理士の先生からは、「現場で感情移入してはいけません。特に、ご家族には感情移入してはいけません。気持ちがもたなくなりますよ。」とされているのですが、いざ現場に出ると、それが本当に難しい。

私も被災地で体験しましたが、ご遺体を発見した時に、周りで捜索状況を見守っておられたご家族の方がどういう表情をなされているかということ、最初はほっとした表情をなさいます。それまで行方不明だったわけですが、それがやっと見つかったということで、ほっとした表情をされます。ただ、同時にがっかりした表情もされるのです。それまでは、助かってはいないだろうと思いつつも、でも、もしかしたら、ほんのわずかな確率でも、どこかで生きていてくれるかもしれない、また、そうあって欲しいと思っていたのだと思います。しかし、ご遺体になって見つかったということで、やはり亡くなっていたのかと落胆されるわけです。そのほっとした気持ちとがっかりした気持ちの両方が表情に出てくるのです。そういうことを考えながら、ご家族の表情を見ていますと、こちらも非常に胸が締め付けられるような気持ちになります。隊員はどうかなと思って周りを見ると、水につかりながら作業をしているのですが、やはり同じように涙を流しながら作業をしています。感情移入してはいけないと言うのですが、現場にいますと、そう簡単ではありません。

先ほど、写真がありました大川小学校で行方不明者の捜索をしているときに、小学6年生のお父さんに話かけられました。娘さんがちょうど中学校に入る時で、制服を作ったそうなのですが、子供がいなくなりました。自衛隊さんには迷惑をかけるが、もう期待はしていないから、とにかく遺体でいいから早く見つけてほしい、遺体があれば制服を着せてあげられるからと言うのです。私の娘も小学校を卒業して中学校に入る時だったので、どうしてもビジネスライクにと言われても割り切れません。

ただ、今回の自衛隊の活動では、ご遺体の捜索だけではなく、例えば人形とかぬいぐるみといった物がたくさん出てきているのですが、そういう物も隊員が丁寧に扱ってくれたということで、たくさんのお礼をいただいているのです。これはご家族と同じ気持ちを持たないと、こういうことはできないと思うのです。司令部から各部隊に指示を出すとしても、10万人もいますから、例えば〇〇地域の行方不明者を捜索しなさい、そこで見つかった貴重品は大事に保管しなさいということしか指示は出せません。人形やぬいぐるみも含めて大事にしなさい等々、そこまで細かい指示は出さないのですが、現場の隊員も、周囲の状況をよく考えて、ご家族の立場に立って、そういう物も大切に扱ったのだと思うのです。確かに、感情移入すると精神的に気持ちが痛むのですが、感情移入できたからこそ、人間的な、温かみのある活動ができたのだと思うのです。その代償として、精神的な不調を訴える隊員もいるのですが、精神的に参ると言うのと、世間では、それは弱い奴なんじゃないかと思われてしまうかもしれないし、また、隊員自身もそう考えてなかなか不調を言い出せない者もいるようですが、決してそんなことを考えてはいけない。弱いのではなくて、心が優しいのです。被災者と同じ思いで、被災者に寄り添って一生懸命活動し、その結果、気持ちが痛んだということであれば、組織として、こういう隊員を絶対に見捨てる

ことがあってはいけないと考えております。したがって、この問題については、省全体で、重要性が認識されています。時間はかかると思いますが、精神的なケアをしっかりとやっていこうと省全体で取り組んでいるところです。

最後のスライドになりますが、今回このように、お礼の手紙をたくさんいただきました。手紙以外にも、現場で声をかけていただいたり、手を振っていただいたり、たくさんの支援をいただきました。私の仕事の1つに現場で隊員が困っていることはないかを調べるというものがありましたが、東北の隊員はなかなか我慢強くて、聞いても、表情1つ変えずに、困ってないです、大丈夫ですと言うのです。ただ、そういう強い彼らですが、子供などからこういう手紙をもらうと、ボロボロと涙を流して喜ぶのです。今回の活動自体は大変つらくて、特にご家族の方のことを思うと、精神的にもつらい状況でしたが、このように国民の皆さんと身近に触れ合うことができ、声をかけていただいたり、手紙をもらったりしました。そういう意味では、隊員としては、大変つらいけれども、やりがいのある現場だったのではないかなというふうに考えています。10万人がここに来てお礼を言うことはできませんので、最後に隊員を代表して皆さんにお礼を申し上げまして、この講演を終わりにしたいと思います。

どうもありがとうございました。

【講演】

（陸上自衛隊第3普通科連隊長兼名寄駐屯地司令 岡部 勝昭 1等陸佐）

ただいまご紹介にあずかりました、岡部です。本日は東日本大震災における災害派遣活動ということで、主として名寄駐屯地の所在部隊がどのような活動をしてきたか及び活動における所見についてお話したいと思っております。なお私は、先ほど紹介がありましたとおり、被災当時は大阪のほうで勤務していきまして、4月1日の異動で調整を受けていましたが、震災の関係で4月15日になりました。ですから実際には発災から約1ヶ月後の派遣活動ということで、若干物足りないところはあるかと思っておりますが、当時いろいろ経験した隊員の話を含めて、さも当初から行っていただかぬのごとくお話させていただきたいと思っております。

それではまず、駐屯地の広報でとりまとめましたビデオを10数分見ていただきたいと思います。

（DVD上映）

まず、名寄駐屯地に所在する部隊ですが、第4高射特科群と方面直轄部隊もありますが、親部隊である第2師団の活動状況の概要について説明させていただきます。

3月11日14時46分、ご存じのとおり震災が発生しました。翌12日夕、第1波、これは留萌にある第26普通科連隊ですが、その機関が第1波として小樽港を出発しました。翌13日、日曜日の朝には、遠軽の第25普通科連隊と旭川に主力をおく第2特科連隊が小樽港を出発しています。以降、名寄に駐屯する第3普通科連隊あるいは上富良野にいる第2戦車連隊などが出発しています。活動地域については、主に岩手県の北部が、当初の人命救助や行方不明者の捜索活動で活動したエリアです。総数として約3,000名の隊員が活動しています。

この図は、名寄駐屯地に所在する各部隊等の活動状況について説明をしています。

まず、第3普通科連隊ですが、当初3月14日から5月10日までの間、主として岩手県の宮古市、山田町において行方不明者捜索活動あるいは復旧支援の活動を行っております。第2期として活動地域を宮城県に移し、主として東松島、石巻等において復旧支援、物資輸送支援、生活支援等で活動しております。

第2特科連隊の第2特科大隊は、同じく3月14日から5月10日までの間、宮古市田老地区で活動しております。その後5月10日から15日までの間、宮古市津軽石地区において復旧支援活動を行っております。

第2偵察隊でございますが、3月12日から4月11日までの間、宮古市から山田町にかけて行方不明者捜索活動などを主として活動しております。4月12日から5月27日までの間には、宮古市田老地区においてそれぞれこのような活動（行方不明者捜索活動、復旧支援、物資輸送支援、生活支援）を行っております。

第4高射特科群ですが、親部隊であります第1高射特科団の活動エリアとして、当初から主として宮城県石巻地区において、行方不明者捜索活動、復旧支援、物資輸送、生活支援などの活動を行っております。

第3普通科連隊の被災地への移動状況ですが、12日の23時に名寄駐屯地を出発しています。13日に東千歳駐屯地で一時待機し、苫小牧港を14日の深夜1時30分に出港し、青森に14日の10時に到着し、そこから車両で宮古市に入っています。実際に宮古

市に到着したのは、14日の16時になります。この間の総移動距離は約900キロ、人員は512名で車両は161両で移動しております。なお、実際に震災が発生したのは、前日の11日ですが、実はその日にスキー競技会があり、まさにそれが終了していろいろ残務をしている時に発災しました。発災と同時に非常呼集、その場に待機ということで、ずっと駐屯地の方で待機をしていました。ただ、いつ部隊が出発できるのか。これはいろいろフェリーなどの手配状況にもよりますが、いつ出発できるのか不明のままずっと待機していたということです。また、被災地でどういうものが必要なのかというものが不明で、考えられる物は逐次準備をしていましたが、実際にはいろいろな物を現地で調達したりといったこともございました。ちなみに、トピック的なことですが、実は3月12日に結婚式を挙げた隊員が1人おりました、これは当時の部隊長等も悩んだと思いますが、お昼ということでとりあえずいつ出るか分からないけれども、出発となったら途中で帰るといような条件で結婚式を済ませたという話を聞いております。なお、参加した隊員は、お酒類などは一切無しでした。もう1つ言いますと、この時期に各部隊で年度末の旅行などを計画してまして、この発災によって全てキャンセルということで、通常だとキャンセル料などを取られるのですが、ホテルのご厚意によってキャンセル料なしで済んだということでした。

車両の積載状況です。これはWAPCといたしまして、当時は瓦礫がたくさんありましたが、機動力が高いため、こういう車両も必要だろうということで、この車両で前進をしております。

宮古市への到着状況です。3月14日、既に16時という時間で、1時間、2時間もすると暗くなるという状況でしたけれども、部隊の方はとりあえず現場に入って、明るいうちにはできることはしようということで、宮古市に到着後、暗くなるまでとりあえず部隊を展開して捜索できる範囲で捜索をしました。

当時現場に入った時の状況です。皆さんがテレビなどで見ているとおりです。先ほど言ったように、夕方に着いていますので、その晩については、隊員は車両の中で夜を過ごしていると。北海道の隊員とはいえ、東北も寒うございますから、非常に冷えた。それを耐えて、宿営の準備も不十分でありますので、車両の中で一夜を過ごして、また翌日から活動するというような形でした。

当初の捜索は、機械がないものですから、瓦礫の山を部隊が展開して、手でどかせる物は、人海戦術でどかせる物はどかして捜索あるいは救助する。足場も非常に劣悪ですので、着ている物も、釘であるとか木材の破片といった、瓦礫でも鋭利な部分がありますから、靴なども結構傷んで、けがをする隊員も中にはいました。その中をかき分けて、生存者はいないか、あるいは不明者が見つからないかということで捜索をしています。

途中では雪も降って、非常に寒い中で活動しております。

河川にも、非常に瓦礫が積もっています。

少しの隙間にもいないかということで、もしかしたら取り残されているという状況もありますので、手がかき分けられる物については全て捜索する、というのが初期の段階です。

川の中についても、どこに行方不明者がいるか分かりませんので、全て取り除きながら捜索しているという状況でした。また、自衛隊にはゴム手袋のような装備はありませんので、こういう物もできるだけ多く調達しています。ただ、先ほど言いましたように、釘や瓦礫ですぐに穴が開いてしまうという状況で、実際には手袋の中に水が染みてビショビシ

ヨの中で隊員は我慢してというか、特に何も言わず黙々と捜索活動に専念していたという状況です。

家についても、入口がないところについては、屋根をぶち抜いて中に侵入し、くまなく探しました。

先ほど補佐官からありましたように、貴重な思い出の品は、見つけた近くに集積しております。ご家族の方もご家族の中に行方不明者がいると、自衛隊さんが見つけてくれないかということで、定期的にその場所に来て待っています。あるいは被害にあった家の中から、何か思い出の物は出てこないかということで、定期的に来て、思い出の深い物を持ち帰っていました。

徐々に機械が入って、河川の瓦礫も徐々に撤去されてきていました。

ものすごい量の瓦礫がありますので、当初は機械のないところで隙間を見つけて捜索していたのですが、我々もご家族もこの瓦礫の中にまだいるのではないかという思いなので、最終的には重機を使って瓦礫を全て排除して、そしていませんでしたとなれば、我々捜索している方も納得するし、ご家族も納得するというのが実態であります。

警察や消防とも連携して活動していました。

比較的我々が活動したところでは、ご遺体の大きな損傷はありませんでした。それでもあれだけの土砂に流されていますので、ご遺体の方もかなり汚れており、隊員は自分の水筒などに持っている水を布に含ませて、お顔とかを綺麗にしてご家族の方にお見せすると。一緒にお線香を上げてご冥福を祈って安置所に運搬していくというような活動をしておりました。

派遣隊員の状況ですが、岩手県の老木地区の河川敷にある公園に第2師団のほとんどの部隊が宿営して、ここを拠点として先ほどの派遣現場、派遣活動地域に移動しました。当初の10日間くらいは朝3時くらいに起きて、4時くらいから移動を開始し、明るくなる前から暗くなるまで活動するような行動が続いていました。ご承知のとおり、食事の間はずっとレトルトパック、携行食と呼んでいます。これで過ごしていました。これだけだと野菜や水分が不足しますから、便通が悪くなったという苦労もありました。宿营地1つ1つの天幕ですが、長い隊員については2ヶ月、3ヶ月もの間この中で生活し、活動しておりました。ただ、自衛隊も普段の訓練でこういう場所で十分にやっていますので、皆さんが考えるほどストレスは溜まりませんが、派遣活動間のいろいろなつらいことがあまりにも長期化すると、体調や気持ち的にも少しずつストレスが溜まりますので、先ほど補佐官からもありましたが、少し離れた近くの駐屯地に一時的に戻ってお風呂に入ったり、駐屯地で調理した温かいご飯などを食べ、少しゆっくり寝て、次の日からまた元気な体で活動するという形で行っていました。活動当初はこういうことはできませんが、徐々に戦力回復ということも重視して活動してきました。

生活支援ですが、保育園などにも支援物資を輸送するなどの活動を行いました。

第4高射特科群については、宮城県の方で主として生活支援の活動していました。後半になって、小学校の整備というものも実施しました。

全国の方々から、激励メッセージを度々いただきました。こういうものが隊員の活動の励みになります。全国の皆さんからいただくと、逆に我々のほうがありがたいという気持ちでいっぱいになります。皆さんからありがたいという言葉をいただきましたが、こういう激励文や寄せ書きをいただくというのは、非常に力になります。やってて良かったとい

う気持ちでいっぱいになります。

活動の終盤になって、任務も替わり、その土地、活動地域を去らなくてはならないという時期に徐々にありますが、自衛隊で整備した山田北小学校では、そのお礼ということで、小学生も30名程度と少ないのですが、感謝セレモニーを開いて感謝していただきました。

被災地の皆さんからもそれぞれ見送りをしていただきました。

後半には加藤名寄市長にも来ていただき、慰問・激励をしていただきました。現地で活動している隊員にとっては、駐屯地が所在している市長が激励に来てもらえるということは、とてもうれしく思っており、感謝しております。

これから見ていただきますのは、震災から1年が経過して、先日駐屯地の広報官が1年後のそれぞれの地域を写真に撮影してきましたので、スライドで見ていただきます。

山田町では、何もなかった公園に温泉を作って無料で開放して、町民の方にゆっくりしてもらおうということで作っていました。

次に、派遣期間のエピソードをいくつか紹介させていただきます。

「1匹の老犬の救助」ということで、私たちの部隊が行ったのは震災から3日後でしたので、残念ながら活動エリアで生存者を発見することはできませんでした。その捜索の中で、側溝の中で瓦礫を除去している時に、何かぬいぐるみみたいなものがあるということで瓦礫を除去すると、1匹の衰弱した老犬で、その犬を救助しました。この地域の海岸沿いに網がたくさんあって、それに絡まって逃げられなくなっていたのを救助しました。先日撮影しに行った時には、近所の住民の方のところで元気になって生活しておりました。

2つ目ですが、後半は重機がいっぱい入って、自衛隊も機材をある程度持っているのですが、実際的な瓦礫の撤去、捜索活動を行うにあたっては、実は民間の機材の活動がほとんどでした。山田町においても100台くらいの重機と契約して活動していました。その中のお1人に、息子さんが行方不明というオペレーターの方がおられました。ずっと休みなく作業をしているという姿が印象に残っておりまして、その後どうなったかというのは分かりませんが、息子さんが行方不明になっているお父さんが、自分の重機を運転して瓦礫の撤去・捜索というものをやっていたというのは印象に残っています。実は、町が契約した重機というのは、ゴールデンウィークの1週間くらいを休んだんです。この間、自衛隊は休まずできる範囲の捜索はやったのですが、その時に重機のオペレーターのほとんどの人が、自衛隊さん、町に言ってくれ、我々は休みは必要ないと言ってきました。ゴールデンウィーク休暇をとるという契約をしているようなので、我々からはなんとも言えませんが、そうやって機材を使って民間の人たちがそれぞれ捜索をしていたのですが、こちらは休みなんか必要ない、ずっと自衛隊と一緒にやりたいと言って、休みもせず働いていたということも印象に残っています。

「1km流された家から発見した1枚の年賀状」ということですが、このタイトルだとよく分からないと思いますが、いろいろ捜索していると、1階部分が潰れて屋根しか残っていない家があります。それも重機で撤去するには、それぞれの家の持ち主に了承を得つつ行うのですが、そこでこの家の家主を捜そうと思って、廃材をいろいろ探していたら1枚の年賀状が出てきて、そこからご本人が特定できたということです。その後、その家主さんが、家を探していたのだけでも諦めていました、でも見つかって良かったという話をしました。その家の中からはいろんな思い出の物、孫の入学式や卒園式の写真、あるいは入学しようとしていた中学校の制服も傷まないで見つけて喜ばれたということもありました。

最後に、この派遣活動を通じて感じたことをいくつかお話させていただきます。先ほど補佐官からは、自治体は大切であるという話がありました。それは私もそのとおりだと思います。復興が進むというのはいろんな意味で自治体がコントロールして進んでいくわけで、それを我々がお手伝いするのですが、自治体も大事ですが、もう1つ、地域コミュニティというものが非常に重要であるということです。これは人命救助、行方不明者捜索活動を我々もする時も、自治会の方、消防団の方、被災地域の海岸沿いの漁協関係者、こちら辺の方々には非常にいろんな情報を持っていて、そういった情報が非常に役に立ちました。やっぱりよく知っています。「あそこの家の〇〇さんが△時にこうしていたけどいないんだ。」「□□に何人いた。」と、細かい情報を知っています。そういう点では地域コミュニティという活動は必要です。また、実際の被災者が活動する上で地域コミュニティを中心として生活し、復興していく姿を見て、本当に大事だと思いました。

2つ目ですが、災害時のいろんな判断として、「だろう」は危険だと感じました。これはいろいろなテレビなどの報道でもありましたが、本当にそのとおりだと思います。ある女性の話ですが、自宅にいた女性の母親は、逃げまじょうと言った時に、津波はここまで来ないと言って、その場に残って避難せずに亡くなったそうです。いろんな過去の経験もありますし、ご本人の思い込みもあると思いますが、そういうのは時によって判断を誤らせることがあります。

あとは自衛隊に関してですが、自衛隊に対する感謝・信頼感というものを非常に良く感じた活動であったと思います。感謝されるから活動するというわけではありませんが、それを強く感じたところです。当初の朝早くから夜遅くまでの活動に対する感謝、あるいは生活支援活動において、避難所に自衛隊が行ってコントロールを始めるのですが、無統制になると避難所にいる人たちもギスギスしてくるのですが、我々が行って給食などについて若干統制させてもらってコントロールすることで、徐々に避難所に秩序が出てくるというのが実態で、その時には自衛隊さんが来てくれてよかったという声も聞かれました。あるいはいるだけで被災地域における治安維持になる。我々が出て行く時に、自衛隊さん、何もやらなくていいからいてくれ、迷彩服でいるだけで安心するという声も結構聞きました。でも、何もやらなくていいと言われても困るんですが、先ほど市長から言われましたが、車が通るだけで手を振ってくれるということです。そういうふうに思われているというのは、信頼されている、非常にありがたいと感じました。私の、連隊長という立場からすると、活動した隊員の使命感というか責任感に非常に敬服しております。文句も言わず、本当に苦しい中ずっと活動していると。最後に言いたいのは、自衛隊は国としての最後の砦であると、この自覚を自衛隊、自衛官みんなが持っているということで皆さんには安心していただければと考えています。

終わりに1日も早い東北地方の復興をお祈り申し上げます。また、そのために個人あるいは組織としてできることをこれからも考えなければいけないと思っております。被災地は、まだ瓦礫が除かれただけです。これから個人あるいは組織として考えていく必要があるというふうに考えます。

私からの話はこれで終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

【質疑】

質問者：自衛隊の皆さんは、NGOやボランティアの方々とどんな協力を行っていたのか。

須藤政策補佐官：時間の関係から、ボランティアの方々の仕事については言及しなかったのですが、今回の震災では、たくさんの方々に支援に来ていただきました。細かい話は省略しますが、我々も可能な限り柔軟に対応しようとしたのですが、それでも、災害派遣活動では、自衛隊として「できる」と「できない」ことがあります。例えば、民家をきれいに片づけてあげることはできません。その点、ボランティアの方々は制約がありませんので、まず自衛隊が民家の前の道路を片付ける。その後ボランティアの方に入ってもらって、家の中もしっかり片付ける。そのように役割分担をしながら、活動をしていました。皆さん意欲的に活動していただいて、ボランティアの方がいなければ、ここまで自衛隊も活動できなかったのではないかと考えております。

質問者：今回の活動で現地調達したもののうち、今後のことを考えて、装備品として計画的に調達したほうがよいと感じたものがあれば教えていただきたい。

岡部連隊長：まずは阪神・淡路大震災において、当時は自衛隊の対応が遅かったのではないかと、十分にできなかったのではないかとという教訓を踏まえて、具体的にいうと人命救助セットをその時に装備品として装備しています。また先ほど須藤政策補佐官から話がありましたヘリ映伝というものも進化した部分がありまして、ヘリで撮影したものを直接防衛省のほうですぐに見られる。トップの指揮官の判断ができるようになった。そういう部分では進化したと言えると思います。今回は、もちろん瓦礫を撤去するものは、現地調達しました。瓦礫を引っかけるものあるいは鉄パイプなどを調達したというか、補給処というところを臨時で作ったりして活動しました。これは防衛省としての考えではないと思いますが、震災においてはいろいろな被害の特色があると思います。津波被害ということでは、装備品にするかは別にして、調達、準備できると思います。ただ、震災というのは不測の被害というものに常に備えるとなると、予期し得ないところもあるのかということ、最初から災害に対する活動に必要なもの、用意すべきものが見積もれるかどうかということ100%はなかなか難しいのかと。予期できるものは装備品化するべきだと思います。ただ、防衛省・自衛隊の立場というよりも、予期できるのであれば自治体とかでストックしておく。先ほど食糧の話もしましたが、個人でのストック、自治体でのストック。また、防衛省・自衛隊で持っているものというのは、その時にはき出して使うことができますが、もし必要なものがあれば、見積もることができれば、それは必要があるものなんだろうと。それが自衛隊の装備品としてとなると、明確には答えられませんが、いずれにしても阪神での震災と今回の震災で使うものは全く違ったということもありますし、予期できないというのが一番怖い。臨機応変に速やかに調達できる仕組みを作っておくというのが必要なのかなという感想は持っております。

以上